ジャパンバードフェスティバル（JBF）2026

終了しました

第36回鳥学講座

アホウドリ：絶滅寸前から１万羽に回復

講師：長谷川 博（東邦大学名誉教授）

長谷川 博先生（最後の鳥島調査で、2018年12月）

大型海鳥アホウドリは羽毛を採るために乱獲され、1949年に絶滅したと宣言された。しかし、2年後の1951年、伊豆諸島鳥島でごく少数の生存と営巣が確認され、再発見された。その後、鳥島気象観測所の職員が最初の繁殖状況調査と保護を行ったが、1965年に島で火山性地震が群発し、噴火の危険を避けて観測所は閉鎖され、調査と保護活動はとだえた。8年後の1973年4月､ランス･ティッケル博士は鳥島に上陸して調査した。かれに刺激されて、ぼくは1976-77年繁殖期に中断していた繁殖状況の調査を再開した。その年、ひなはわずか15羽だった。

1979-80年期から繁殖つがい数と巣立ちひな数を確定し、繁殖成功率を監視できるようになった。そして、低下していた繁殖成功率（約40%）を引き上げるため、植栽による営巣地の改善を提案した。それが実行され、1984-85年期に繁殖成功率は67%になり、約50羽のひなが巣立つようになった。その成功も束の間で、1987年の秋に営巣地となっていた燕崎の急斜面で、大雨によって表層崩壊が起こり、火山灰の泥流が営巣地に一部に流れ込んだ。繁殖成功率は40%台に低下し、巣立ちひな数が停滞した。この緊急事態に対処するため、1）大規模砂防工事と植栽によって従来営巣地を保全管理して巣立つひなを増やし、2）泥流のおそれのない北西側のなだらかで広い斜面に、デコイと音声を利用して、従来営巣地生まれの若い鳥を誘引し、新しい営巣地を形成する計画を提案した。従来営巣地の保全管理工事は1993年から進められ、新営巣地形成計画は1992-93年期に始められた。1997-98年期に従来営巣地での繁殖成功率が67%に回復し、以後、毎年100羽を超えるひなが巣立つようになった。新営巣地では1995-96年期に最初の１組つがいが産卵したが、その後つがいの数はなかなか増えなかった。ついに、2004-05年期に４組のつがいが産卵して、新営巣地が確立した。

これらの保全計画が実を結び、鳥島集団の繁殖成功率は、前期（1979-91年）の平均55%から中期（1992-2004年）59%、後期（2005-17年）68%へと改善され、それにともなって集団の年成長率は6.5%から6.9%、9.1%へと上昇した。そして、2018年に鳥島集団のつがい数が1,000組、総個体数は5,000羽を超え、8年後には10,000羽に到達すると予測された。その後の山階鳥類研究所の調査によって、2026年に10,000羽を超えたことが明らかにされた。個体数が増えたことによる成長率の低下はまだ見られないので、鳥島集団は今後しばらくの間、同率で成長すると予測される。

講師プロフィール

長谷川 博（はせがわ・ひろし）：1948年静岡県生まれ。東邦大学名誉教授。京都大学大学院で動物生態学を専攻し、1977年から2014年まで東邦大学理学部に勤務。絶滅危惧種アホウドリの繁殖状況調査と保全研究に取り組んだ。

日時：2026年11月7日（土） 13：30～15：00
会場：我孫子市生涯学習センター アビスタ 1Fホール（千葉県我孫子市若松26-4）
主催：我孫子市鳥の博物館・（公財）山階鳥類研究所